

論文の和文要旨

論文題目	境界という自由、境界という苦痛 —多和田葉子とリノール・ゴラーリクの作品における 異種間コミュニケーションをめぐる—
氏名	プロホロワ・マリア

本論文では、多和田葉子とリノール・ゴラーリクの作品における異種間コミュニケーション（すなわち、人間-動物、あるいは種族の異なる動物同士のコミュニケーション）の表象を中心に比較分析を行い、それぞれの作家の境界観ならびに動物表象の特徴を明らかにした。

1960年に日本で生まれた多和田葉子は、1982年からドイツに移住しており、日本語とドイツ語で創作活動しているバイリンガル作家として知られている。一方、リノール・ゴラーリクは、1975年にソ連のドニエプロペトロフスク市（現在はウクライナ）で生まれ、1989年には両親ともにイスラエルに移ったが、その後はイスラエルとロシアを行き来している。ゴラーリクは主にロシア語で創作をしているが、ヘブライ語や英語を用いることもある。すなわち、多和田とゴラーリクはともに、国境や言語の境界を越えながら創作している、いわゆる「越境作家」であるといえる。序論では、二人のこうした背景とともに、彼女らの異種間コミュニケーションの表象における「境界」、それから動物表象に注目する意義について論じた。

20世紀後半、グローバル化が進むにつれて、まずは「国境」という地理的・政治的な境界線が注目されるようになったが、次第にその解釈がより広く、深くなっていき、学術的な関心の先が「境界」という多義的かつ主観的な空間に移った。こうしてボーダースタディーズ（境界研究）において生まれた手段や理論は現在、ジェンダー研究、環境批評、人間と動物の関係を考えるアニマル・スタディーズなどの分野でも、様々な二項対立における中間的存在やその区切り方を表すために使われるようになってきている。あらゆる二項対立が崩れていったり、その中の関係性が多様化していたりする現代世界では、「境界」が重要なキーワードの一つである。文学においても、国境や言語を越える作家、すなわち普段から「境界」と付き合うことの多い作家が注目され、国境表象に限らず、彼らの境界的表象が「境界」の捉え方において新たな展望を提供することがある。そうした中、同じ「越境作家」であり、互いに現代を生きている一方、文化的なバックグラウンドが大きく異なる多和田とゴラーリクの作品を、「境界」の観点から比較分析することで、彼女らの境界観の特徴を明確に捉えるとともに、現代世界における「境界」、その捉え方に対するより立体的な理解が得られると思われる。

序論ではさらに、境界的表象を主な分析対象とする理由も明確にした。第一に、そうした表象が複数の根本的な境界（他者と自己、人間と動物、文化や価値観の境界）を含んでおり、それぞれの作家の「境界」の描き方を総合的に検討できることを挙げた。また、21世紀の文学において見られるようになった動物表象の新たな傾向と、彼女らの描く動物表象を照らし合わせることによって、人間-動物の境界（およびそのほかの「境界」）に対する多和田とゴラーリクの立場をさらに明確に特定できることも、その理由の一つとなった。

続いて、第1章と第2章では、本論の出発点となる全体的背景（異種間コミュニケーション以外の表象から見出せる多和田とゴラーリクの境界観の傾向、および近年の世界文学・思想における動物の捉え方の変遷）をまとめ、第3章と第4章ではそれぞれの作家の場合を比べながら、彼女らの作品における異種間コミュニケーションへのアプローチの解明を試みた。

第1章の第1節では、先行研究および多和田自身の考察も踏まえながら、多和田の（主に2000年以降の）作品における境界的表象の傾向について論じた。その際は特に、言語をめぐる境界、現実と非現実の境界、男女の境界、生と死の境界の描き方に焦点を当てたが、結果として、多和田の作品の中では共通して、多くの「境界」が制限ではなく創造的な中間地帯として、肯定的に描かれているのではないかという考察に至った。また、一つの「境界」に立つことができる登場人物は他の「境界」とも深い関わり合いができていることから、彼女の作品において、そうした中間地帯が重なり合う独自の空間が存在すること、それから境界との関わり合いに適した特別な「体質」（正確に言えば内面の特徴）が存在する可能性を指摘した。なお、多和田の「境界」の考え方において言語が中心的な役割を果たしていることも示した。

第2節では同様な観点からゴラーリクの越境観の主要な傾向の予備分析を行った。まずはゴラーリクが研究活動（主にファッション史研究）で境界をどのように扱っているかということに注目し、「トランスグレーション」（境界侵犯）および「美学的挑戦・挑発」というキーワードを見出した。その後、彼女の作品における主な境界的表象を読み解いた。特に、「美学的挑戦・挑発」が見られる彼女の境界的文体、宗教的なタブーの扱い方に焦点を当て、複数の角度から描かれている生と死の境界や、「越境作家」にしてはゴラーリクはあまり注目していないが、国境や言語の境界についても考察を行った。結果として、ゴラーリクが研究に引き続いて創作においても、何かの制限を象徴する境界線としての「境界」に興味を持ち、表現や思想の面ではそうした境界を突破した自由な姿勢、また作品の内容としては境界の存在が試練となっている不自由な人々の内面を重視しているという傾向が見出された。あわせて、「新誠意主義」との関連性にも触れた。

第2章では、本論の元となる背景情報を改めて補充する意味で、21世紀の思想や文学における動物の位置の変化、その捉え方および描き方の傾向に目を向けた。その際、特に動物との対話の可能性、動物の記号システムに対する意識を中心的な軸としたが、21世

紀初頭を境に、コミュニケーション能力が人より劣っていると言われる動物に人間の言葉を教えるという人間中心的な立場から、動物の個性を尊重した効果的なコミュニケーションの仕方に考えが移っていることが判明した。なお、21世紀（特に2010年代以降）の世界文学にもこうした先進的な傾向の兆しが見取れると同時に、動物を人間の「鏡」として機能させてきた従来のジャンル（動物寓話など）の伝統も受け継がれていき、二面的な（境界的な）動物表象が目立つようになってきていることに言及した。L. J. マッケイ「その国の動物たち」（オーストラリア、2020）、A. アレクシス「十五匹の犬」（カナダ、2015）、J. マーフィー「言葉話す動物」（アメリカ、2020）および町田康「諧和会議」（日本、2017）を例として、人間の言葉を語る動物を登場させながら、様々な方法で動物の主体性ならびに他者性に配慮を示すという、動物表象をめぐる一部の現代作家に共通する特殊な姿勢を明らかにした。

第3章と第4章では、第1章と第2章の考察をふまえて、多和田とゴラーリクの描くコミュニケーション、特に人間と動物（あるいは種類の異なる動物同士）のコミュニケーションに注目し、その描き方を追った。多和田の作品では絵本『おおかみ県』（2021）、戯曲「動物たちのバベル」（2014）および長編小説『雪の練習生』（2010）、ゴラーリクの作品では動物を扱った小話のほか、長編小説の『呼吸できるすべてのものたち』（2018）と『某記念病院』（2022）、および『ヴェニサーナの冷たい水』（2018）を始めとした子供向けのファンタジー・シリーズを主な分析対象とした。二人とも異種間コミュニケーションの表象を積極的に用いている一方、中心的なテーマが一致していないことが明らかになり、多和田の異種間コミュニケーションの表象では、ステレオタイプや階層意識の「解体」および「コミュニケーションの可能性」に目が向けられている一方、ゴラーリクの場合はコミュニケーションにおける人間の「自己中心性」と「共感」の対立、「倫理的行為」の本質の追求がポイントとなった。

また、結論で述べたように、こうした異種間コミュニケーションの表象を中心に捉え、他の作品における境界的表象描も考慮して見出される、「境界」に対する彼女らの見方も大きくかけ離れていることが分かった。ゴラーリクの場合、境界は基本的には一定の線として描かれており、彼女の作品における境界は、①表現や思想の自由を妨げる「障壁」、②自分の意思では越えられず苦しむ「限界」、③人間の行動および人間性の指標となっている「制限」といった種類に分類できる。なお、境界は制限であっても、必ずしも悪いものではないとされ、神に与えられた試練の意味合いを持つ②の「限界」、「良い人である」ことを手伝う③の「制限」などがある。同時に、ゴラーリクは、境界線が殆どの場合において苦痛をもたらすとし、境界と付き合う「小さな人々」の苦痛に寄り添った書き方をしていることも示した。それに対して、多和田は「境界」というものには楽しみや新たな可能性を見出すことが多く、人間と動物の境界を含めて、境界を一律に中間地帯のような「空間」として位置付けている。境界観のこうした違いの元に、それぞれの作家としての志や異なる文化背景、また移住した経緯の違いがある可能性を提示した。

その反面、二人の境界的表象には似た傾向もあると考えられる。まず、二人とも、境界の「多義性」、すなわち同じ境界が人によって様々な意味を持ちうることを作品において示している。また両者とも、境界が曖昧になり、不透明になっている現代世界の性質を鋭く捉えており、そこで新たに明確な境界線を引くより、境界のない空間、すなわち団結の要素を探す必要性をそれぞれの方法で表現していると思われる。ゴラーリクの場合、それはすべての生き物に行き渡る普遍的な「情動的共感」および「呼吸」に見出され、多和田は生き物の特権である「魂」というコンセプトと、「認知的共感」（他者になりきる能力）を目指す重要性を訴えている。

最後に、動物表象に対する多和田とゴラーリクのアプローチについても考察を加えた。動物表象において用いる具体的な手法は異なるとはいえ、第2章で示した傾向が彼女らの作品にも反映されていることが分かった。多和田は動物に言葉を持たせ、その言葉によって階層を逆転しようとしている一方、ゴラーリクは動物に言葉を持たせない・話させるに拘わらず、彼らの主体性（人間にとって「便利な」他者ではないこと）を明確に表示している。

このように、本論文では、二人の「越境作家」の作品の分析を通して、人間と動物の関係性が徐々に変わってきていることの新たな証明が得られたほか、現代世界における境界全体の性質に対する、両者間で根本的に異なる見方と、共通する認識を明らかにし、この分野における今後の研究の土台を固めることができた。